

日本學報 別刷本

第72輯・pp.41~58

認知言語学的観点による日本語の連体修飾研究

—連体修飾節・ノを用いた連体修飾を中心に—

森山新

moriyama.shin@ocha.ac.jp



韓國日本學會

2007. 8

<http://kaja.or.kr>

認知言語学的観点による日本語の連体修飾研究

－連体修飾節・ノを用いた連体修飾を中心に－

森山新*
moriyama.shin@ocha.ac.jp

＜要 旨＞

本稿は日英の連体修飾構造を対照しながら、認知言語学的な観点を用い、日本語の連体修飾構造の特徴を明らかにしたものである。連体修飾節を用いた連体修飾にしても、of / ノを用いた連体修飾にしても、英語の場合には、空間的、論理的、文法的な意味での本質的關係 (intrinsic relationship) が求められるのに対し、日本語の場合にはそのような用法のほかにも、その場のコンテキストに支えられた語用論的推論に依存した用法も発達していることが明らかになった。

ここで明らかになった知見は日本語教育における連体修飾の指導に生かしていくことができる。具体的には、英語などにはあまり見られない、語用論的推論による連体修飾節やノの連体修飾用法の習得が困難であると予想されることから、それらが重点的に教えられることになる。例をあげれば、①連体修飾節では、英語であれば関係節で表される「補足語修飾節」やthat節や関係副詞節で表される「内容節」だけでなく、「語用論的推論による連体修飾節」や「相対名詞修飾節」も日本語では連体修飾節になりうることを具体例とともに教える。②ノの用法でも所有、所属、包含、格関係、同格といった本質的な関係だけでなく、語用論的推論に基づく連体修飾用法があることを示すことが有効であろう。

また、原材料や手段・媒体、時や場所、様態、特徴・属性などのより親密な関係でも、ノをつけて連体修飾語を作ることができることも示す必要がある。

主題語：認知言語学、連体修飾節、ノ、of、語用論的推論

1. はじめに

今世紀に入り、認知言語学は応用認知言語学を唱え、言語習得や言語教育に対し示唆に富んだ様々な提案をしはじめている。それは英語習得・教育を皮切りに始められたが、今日では日本語習得・教育の分野にも及んでいる (森山2007)。

寺村 (1975-1978) によれば、日本語の連体修飾節構造は、修飾語と被修飾節との間に格関係が成立する「内の関係」と、そのような関係が成立しない「外の関係」とに分類される。この用語を用いれば、英語の連体修飾構造は「内の関係」が多いのに対し、日本語の場合には「内の関係」とともに「外の関係」も発達している (詳しくは後述する)。そのため、後者については非用も含め、学習者にとって習得が困難な可能性がある。

また日本語では連体修飾語を作る助詞としてノがあるが、寺村 (1991: 238) や西山 (1993: 65) などはその使用域の広さについて述べている。そうであるとすればこれに相当する英語の前置詞ofとどの程度対応するのかについても明らかにしておく必要がある。

Comrie (1996, 1998, 2002) によれば、日本語の連体修飾構造の制約は、統語論的な場合

* お茶の水女子大学 准教授

もあるが、語用論的な場合もあり、統語論的制約が強く働く英語などのヨーロッパ型言語とは異なり、その使用域が広いことが述べられている。

以上のことが事実なら、日本語の連体修飾節やノによる連体修飾は英語などのヨーロッパ型言語よりも広い使用域を有し、特に語用論的な制約しか働かない連体修飾の習得が難しいことが予想される。

本稿では認知言語学、中でもLangackerの「合成」や「イメージスキーマ」、「意味カテゴリー構造」などの知見を生かし、日本語の連体修飾構造全般の言語類型論的特徴を明確にする。Langackerの知見を用いるのは、第一に「合成」の考え方が、統語論的制約による連体修飾だけでなく、語用論的制約による連体修飾をも説明できること、第二に「イメージスキーマ」や「意味カテゴリー構造」は、統語論的制約による連体修飾と語用論的制約による連体修飾との関係や異同を示すことができること、による。さらに本稿は日本語の学習者に連体修飾の言語類型論的特徴をわかりやすく示す方案を模索し、日本語教育に生かすことを最終的な目的としている。最近、認知言語学的観点を生かした辞書などの教材開発が活発化しており、認知言語学のこれらの知見が日本語の連体修飾の言語類型論的特徴を明らかにするだけでなく、学習者にわかりやすく示すのにも適していると思われる（このことは認知言語学の応用可能性を検討するという意味で、他の言語理論を排除するものではない）。具体的には連体修飾節とノによる連体修飾の構造を研究対象とし、言語類型論的に対極をなす日本語と英語の場合と対照しながらその特徴を明らかにしていく。

2. 先行研究

2.1 Langackerの合成の考え方

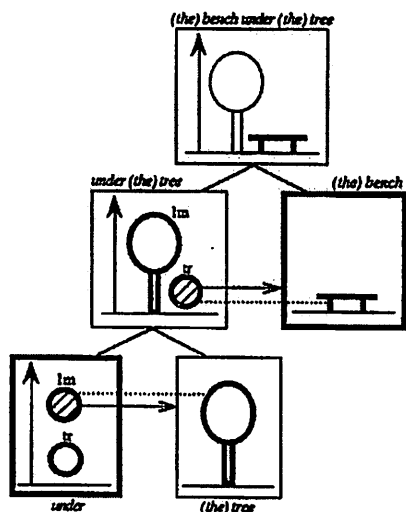


図1 the bench under the tree (Langacker2000 : 79)

図1はLangackerの合成の図式化の方式に従い、the bench under the treeという連体修飾構造が合成される構造を図式化したものである(Langacker2000: 79)。合成は最下段から上方へ向かって進んでいく。太線の枠や枠内の太線は焦点があてられて前景化されていることを示し、各段階の太枠は主要部(head)を表す。点線は対応関係、水平方向の矢印は精緻化を示し、斜線の網掛け部分は精緻化される部分(e-site)を示す。tr、lmはLangackerの用語で、trはトラジェクター(trajector: 1st figure)、lmはランドマーク(landmark: 2nd figure)を表している。最下段でまず、主要部underのlmがthe treeによって精緻化されてunder the treeとなる。次の段では、the benchが主要部であるが、これがunder the treeのスキーマ的なtrを精緻化しながら合成がなされ、最上段の構造になる。最上段を構成する2つの構成要素のうち、the benchが主要部でunder the treeが修飾語(modifier)であるため、the bench under the treeとなる。

2.2 日本語の連体修飾に関する先行研究

連体修飾に関する先行研究は数多く存在している(そのレビューについては、加藤(1999、2000、2003)が詳しい)。ここでは、それら先行研究のうち「内の関係」、「外の関係」の考え方を提示した寺村、及び生成文法、語用論、そして本稿と直接関係のある認知言語学の立場からの先行研究を取り上げることとする。

「内の関係」、「外の関係」という用語を最初に用いたのは寺村(1975-1978)である¹⁾。「内の関係」とは連体修飾節と被修飾語とが格関係で結ばれた連体修飾である。なお寺村(1976)では、「短絡」という修飾節を取り上げ、これを「内の関係」の特殊な場合としているが、これは連体修飾節と被修飾語とを単純に統語論的な格関係で結ぶことは難しくなり、後述するように語用論的推論が含まれていくことから、本稿では「語用論的推論による連体修飾節」に含める。一方「外の関係」では、「ふつうの内容補充」と「相対的補充」があるとしている。しかし「ふつうの内容補充」には語用論的推論を含まないものと、語用論的推論を含むものがあり、それらを分けないと日本語の連体修飾の特徴が見えてこない。従って本稿では前者を「内容節」とし、後者を「語用論的推論による連体修飾節」に含める。また「相対的補充」は本稿では「相対名詞修飾節」と呼ぶ。

- ・短絡：頭がよくる本、彼女が腹を痛めた娘(語用論的推論を含んでおり、本稿の「語用論的推論による連体修飾節」に相当)
- ・ふつうの内容補充：選挙に出る考え、一般の人が巻き込まれて負傷するという事件(以上は本稿の「内容節」に相当)、誰かが階段を上がってくる音、魚を焼くにおい(以上は語用論的推論を含んでおり、本稿の「語用論的推論による連体修飾節」に相当)
- ・相対的補充：深酒をした翌日、文子が座ったうしろ、たばこを買ったおつり(本稿の「相対名詞修飾節」に相当)

1)厳密にはTeramura(1970)で既に用いられている。

また名詞+ノ+名詞については、寺村（1991）が以下の4つに分けて分析している。

- ① 連用補語の連体化（N1ガ/ヲN2スル）例）芥川の自殺、伊勢物語の研究
- ② 述語名詞の連体修飾語化（N2ガN1デアル）例）漫画家の加藤さん、首都の東京
- ③ 不完全名詞に対する連体補語 例）首相官邸の前、舌の先
- ④ 所有、所属、全体・一部の関係（N1ガN2ヲ有スル/含むなど）例）私の本、次郎の伯父さん、ブッデンブロック家の人々、会社の車、彼女の眼、カメラのレンズ

奥津（1974）では、生成文法の立場から日本語の連体修飾節の研究を行い、連体修飾節には「同一名詞連体修飾」と「付加名詞連体修飾」とがあることを示した。それらは大まかに、寺村の「内の関係」、「外の関係」に近い。また西山（1993）は生成文法の立場から日本語の「NP1のNP2」と英語の「NP2 of NP1」の違いについて考察している。

語用論的観点から日本語の連体修飾節を分析したのが白川（1986:6）である。ここでは「米子に泊まった朝」、「本を売った金」などの「外の関係」の修飾関係に語用論的推論が働いているとしている。

さらに、認知言語学的観点から連体修飾を扱ったものとしては、松本（1993、1994）、Matsumoto（1997）がある。これはFillmoreのフレーム意味論の知見を取り入れ、日本語の連体修飾節は「フレーム（言語的また非言語的な文脈や世界知識から得られる手がかり）」を用いなければ解釈ができないとしている。そして日本語だけでなく、英語も含めてこれまで統語論的、構造論的に扱われることの多かった連体修飾節に対して再考を促し、同格節や「外の関係」の構文だけではなく、純粋に統語論的、構造論的に分析されるものだとされてきた関係節や「内の関係」のような構造も、実はもっと意味的、語用論的な性格を持っているのではないかと（松本1994:127）と主張している。

また英語のofについては、Langacker（2000）が用法を整理し、ofが本質的（intrinsic）な関係にのみ用いられることを示している（但し日本語に関する言及はない）。

さらにComrie（1996、1998、2002）では、世界の言語を言語類型論的に整理し、言語には関係節化の制約が統語論的なヨーロッパ型言語と、語用論的な制約ともなりうるアジア型言語とに分け、英語は前者、日本語は後者であるとしている。

このように連体修飾は、英語などヨーロッパ型言語だけを見ていると統語論的制約だけで説明できそうに思えるが、世界の言語を見渡してみると、語用論的制約も作用していること、日本語では後者が重要であることが明らかになる。本稿はこれらの見解を踏まえつつも、さらに考察を進め、第二言語として日本語を教える際には、こうした言語類型論的特徴を学習者に明示してあげる必要があること、その際には「いかにわかりやすく示すか」といった点を無視できないこと、といった点を重視すると、Langackerを始めとした認知言語学のモデルが有効であるという考えに立ち研究を行っている。

また日本語の連体修飾節とノによる連体修飾とをひとくりにし、日本語の連体修飾構造の言語類型論的特徴を整理した研究は管見の限り見当たらないことから、それについても考察を行い、日本語の連体修飾全体の特徴を明らかにし、日本語教育に役立てていく。

3. 研究の方法

まず連体修飾節構造について考察する。本稿では連体修飾節構造を、「補足語修飾節」、「語用論的推論による連体修飾節」、「内容節²⁾」、「相対名詞修飾節」の4つに分ける。また「内の関係」、「外の関係」という語は用いず、「本質的關係 (intrinsic relationship) による連体修飾節」と、「語用論的推論による連体修飾節」という用語を用いることにする。それは、以下で詳述するように、「本質的關係による連体修飾節」と「語用論的推論による連体修飾節」に分けたほうが、ofとノによる連体修飾をも含め、連体修飾の日英対照分析がしやすくなり、両語の類型論的特徴が明確になるためである。

「本質的關係による連体修飾節」は日英両語に見られ、「語用論的推論による連体修飾節」は日本語で発達している。そこでまずは日英両語に見られる「本質的關係による連体修飾節」である「補足語修飾節」と「内容節」について述べ、続いて、日本語に特徴的な「語用論的推論による連体修飾節」、最後に「内容節」と「語用論的推論による連体修飾節」が合体した「相対名詞修飾節」について述べる。

3.1 本質的關係による連体修飾節

3.1.1 補足語修飾節

本節ではまず、「魚を焼く男 (the man who grills fish)」を例に、連体修飾節のうち、補足語修飾節を説明する。これは日英両語が持っている修飾構造である。図2はLangackerの図式化したものが、「魚を焼く男 (the man who grills fish)」の連体修飾節の構造を示したものである。この連体修飾構造における「男」と「魚を焼く」とは「男が魚を焼く」と言えるように、格関係 (ここでは主格) が成立している。

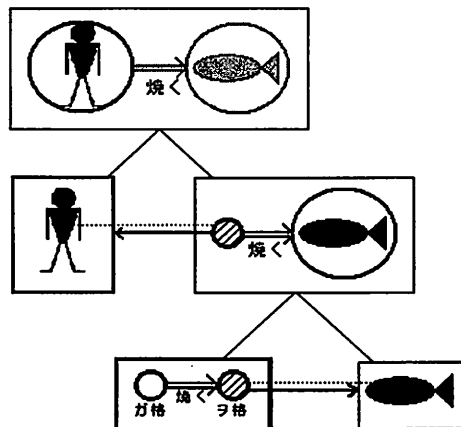


図2 魚を焼く男 (the man who grills fish)

2) 寺村(1980、1981)では「ふつうの内容補充」を「内容節」と言い換えているが、本稿で述べる「内容節」は英語でthat節や関係副詞で表されるようなもののみをさし、語用論的推論による連体修飾節は含めない。

まず、図の最下段で、「魚」が「焼く」事態のヲ格を精緻化して合成され、2段目の「魚を焼く」となる。さらに「男」が「魚を焼く」事態のガ格を精緻化して合成される。この時、2つの構成要素「男」と「魚を焼く」のうち、「男」がプロフィール (profile) されているため、合成後は「男」が前景 (図) で主要部 (head) となり、「魚を焼く」が背景 (地) でそれを修飾し、「男」についての表現が合成され、最上段のように「魚を焼く男」となる。

次に連体修飾構造を日英両語で対照してみる。図3は英語のthe man who grills fishを図式化したものであり、図4は日本語の「魚を焼く男」の構造を図式化したものである。

英語の場合には図3のように被修飾語が修飾節に前置されるので、被修飾語の格役割や意味役割を明示する必要があり、それが関係節で示されている (ここでは主格whoで動作主であることが示されている)。一方日本語の場合は被修飾語が修飾節に後置されるため、格役割や意味役割は関係代名詞を用いて明示しなくても修飾節の空所として間接的に示される。例えば図4の「魚を焼く男」では修飾節は「魚を焼く」で、主格で表されるべき動作主 (魚を焼く人) が欠如して空所となっていることから、後置される被修飾語の格役割と意味役割は、主格の関係代名詞がなくても間接的に示される。

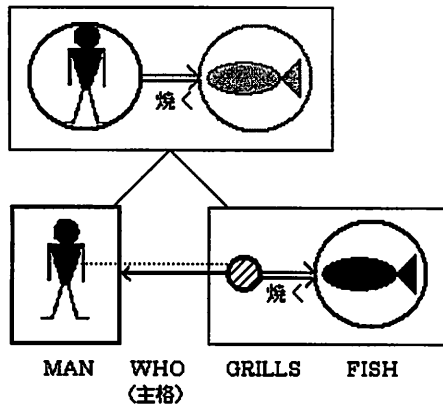


図3 the man who grills fish

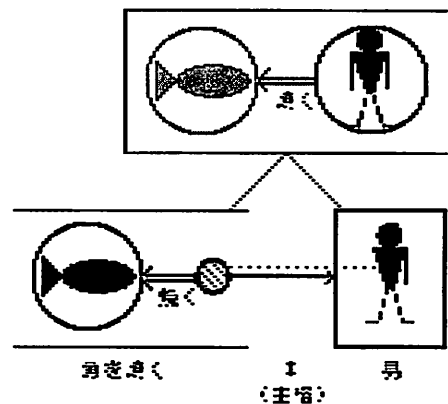


図4 魚を焼く男

3.1.2 内容節

「内容節」は被修飾名詞の内容が非常に漠然としており、それだけでは意味が不完全なため、修飾節を必要とする連体修飾構造である。修飾節と被修飾名詞とが同一物の内容と容器の関係にあるという意味で密接な関係にあり、修飾節が被修飾名詞の内容を規定するものである。英語ではthat節や関係副詞により内容が具体的に規定される³⁾。

①お酒を飲んだ (という) 事実

³⁾松本 (1994) も指摘するように、内容節に語用論的推論が全くないとは言えないが、従来の多くの先行研究で内容節の語用論的推論を考慮してこなかったように、内容節における語用論的推論は少ないと思われる。

「お酒を飲んだ (という) 事実」では、「事実」＝「お酒を飲んだ」で、図5のように両者は同一物で語用論的推論への依存度は低く、容器と内容という関係にあり、「お酒を飲んだ」が「事実」の内容を具体的に述べている (図では同格関係を実線の二重線で示している)。これは英語の場合、that節で修飾される (同格節)。被修飾名詞が引用に関係する発言や思考などに関わる名詞の場合、日本語では「という」を用いることが多い。

一方、「だれかが階段を上がってくる音」、「魚を焼くにおい」など、感覚名詞などが被修飾語になる修飾関係では語用論的推論への依存度が高くなり、「という」を用いることができなくなる。本稿ではこれらは次の「語用論的推論による連体修飾節」に含める。英語でも語用論的推論への依存度が高いという理由からthat節で表せないことが多い。

②お酒を飲んだところ

図6に示されたように、「お酒を飲んだところ」では、「ところ」と「お酒を飲んだ」とが、ある事態の場所 (空間的背景) とそこで起きた事態 (前景) を示している点で一体不可分であり、「お酒を飲んだ」が「ところ」で起きた事態を述べている。これはthat節のような同格節ほどではないが、背景と前景といった密接な関係にあり、語用論的推論への依存度は低く、英語ではwhereによる関係副詞節で修飾されるものである。



図5 お酒を飲んだ (という) 事実



図6 お酒を飲んだところ

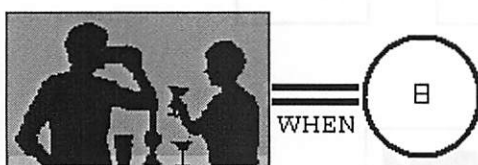


図7 お酒を飲んだ日

③お酒を飲んだ日

図7のように、「お酒を飲んだ日」では、「お酒を飲んだ」が「日」に起きた内容を具体的に述べており、「日」と「お酒を飲んだ」とが、ある事態の時 (時間的背景) とそこで起きた事態 (前景) とを示している。これもthat節のような同格節ほどではないが、背景と前景といった一体不可分の関係にあり、語用論的推論への依存度は低く、英語ではwhenによる関係副詞節で修飾されるものである。

3.2 語用論的推論による連体修飾節

語用論的推論による連体修飾節は、本質的關係による連体修飾節のように修飾節と被修飾語との間に本質的關係が成立せず、語用論的推論に依存して結びついている連体修飾構造である。コンテキストに依存し、話し手や聞き手の双方に語用論的推論が成立しなければ、修飾關係が成立しにくい⁴⁾。英語にはあまり見られないが、以下で見るように日本語にはこのような連体修飾節が非常に発達している。

①魚を焼くにおい

これは寺村 (1975-1978) で「外的關係」に含めている例である。図8では「魚を焼くにおい」が図式化されている。ここでは「におい」が「魚を焼く」により修飾され、「魚を焼くにおい」となるが、「におい」と「魚を焼く」との間には格關係や同格關係など、本質的關係が成立しない。成立するのは語用論的な推論で、それにより2つが合成される。図では破線の二重線で語用論的な推論を示している。

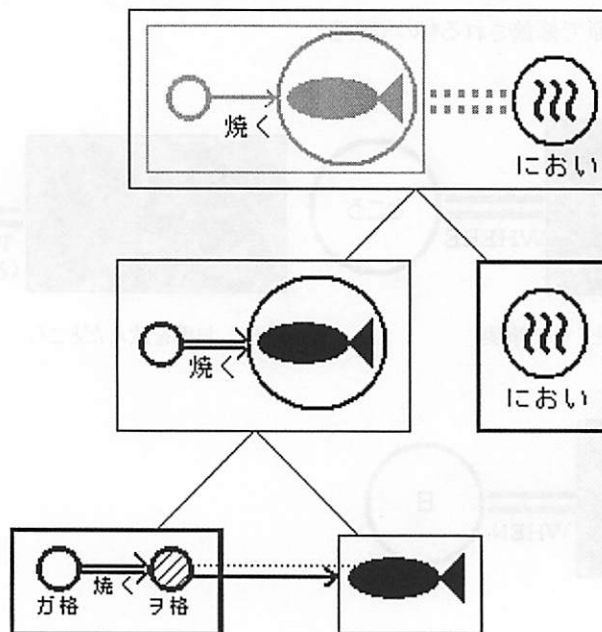


図8 魚を焼くにおい

まず、最下段で、「魚」が「焼く」事態のヲ格を精緻化して合成され、2段目の「魚を焼く」となるのは補足語修飾節と同じである。しかし「におい」は「魚を焼く」事態のどの部分をも

4) 語用論的推論については、Fillmoreのフレーム意味論を用いた松本の研究手法を用いればより詳細な説明が可能であるが、本稿では詳しい説明は省くことにする。

精緻化することができない。「魚を焼く」事態は「におい」と語用論的推論で結ばれるが、精緻化という点ではむしろ「魚を焼く」事態が「におい」を精緻化する。この際、「魚を焼く」と「におい」という2つの構成要素のうち、「におい」がprofileされているため、合成後は最上段のように「におい」が前景(図)となり、「魚を焼く」が背景(地)となって前景を修飾するので、「魚を焼くにおい」となる。

日本語の場合、補足語修飾節では、被修飾語が修飾節に後置されるので、修飾節の空所が自然と被修飾語の意味役割と格役割を指定することは既に述べた。これに対し、「魚を焼くにおい」では、修飾節に空所があって「におい」がその修飾節の空所を埋めるものではない。「におい」は「魚を焼く」事態と関連の深いものであり、語用論的に推論が成り立つ。言い換えれば語用論的推論に依存して連体修飾関係が成り立つのである。また、「魚を焼く」は「におい」の内容をより具体的に規定する働きもしている。

②頭がよくなる本

これは「この本を読めば頭がよくなるような本」という意味であり、寺村(1976)で「内の関係」の特殊な場合としているように「本で頭がよくなる」と言えなくはない。しかしこのようにやや無理をして「頭がよくなる」と「本」の間に格関係を考えるよりは、むしろ図9のように「その本を読むことにより」といった語用論的推論によって合成が行われたと考えるほうが自然であろう。ここでも「本」は修飾節「頭がよくなる」の修飾節の空所を埋めるものでなく、「頭がよくなる」事態と関連の深いもので、語用論的推論で結ばれている。同時に「頭がよくなる」は「本」の内容を具体的に規定する働きをしている。

③野菜が食べられるみそ汁

これは「そのみそ汁を飲めば(野菜が嫌いで食べられない子供でも)野菜が食べられるようになるみそ汁」という意味である。「野菜が食べられる」と「みそ汁」の間にはやはり格関係が成立しにくく、合成を導くのは図10のような語用論的推論である。ここでも「みそ汁」は修飾節「野菜が食べられる」の格関係の空所を埋めるものではない。この例では「みそ汁」は「野菜が食べられる」事態と関連の深いものであるとはいえないが、これは語用論的推論が成立しやすいとはいえない両者の関係を消費者に考えさせ、語用論的推論により結びつけ、印象づけることにより、商品をPRする効果をねらったものである。同時に、「野菜が食べられる」は「みそ汁」の内容をより具体的に規定する働きをする。

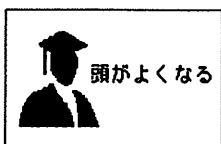


図9 頭がよくなる本

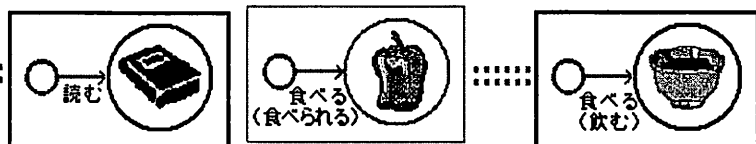


図10 野菜が食べられるみそ汁

3.3 相対名詞修飾節

相対名詞修飾節は、本質的關係による連体修飾節である内容節と、語用論的推論による連体修飾節との両側面を持ち合わせた連体修飾節であり、語用論的推論に依存しているため、英語ではあまり見られないが日本語では発達しているものである。被修飾語が時間・空間、因果関係などの相対名詞で、相対名詞間の語用論的推論が容易なため、修飾節により修飾された名詞の相対名詞を修飾する形となっているものである。修飾節と（本来の）被修飾語の間に内容節の連体修飾関係、相対名詞の間に語用論的推論が存在している。

①お酒を飲んだ翌日

お酒を飲んだ翌日では、図11のように、「お酒を飲んだ」と「日（当日）」とが内容節の關係にあり、「日（当日）」と「翌日」とが相対名詞であるために語用論的推論で結ばれた結果、「お酒を飲んだ」と「翌日」とが修飾關係で結ばれたものである。

この例は時間的な相対名詞（当日／翌日）が用いられているが、「お酒を飲んだ向かいの店」では、空間的な相対名詞（その店／向かいの店）が、「お酒を飲んだ結果、頭が痛い。」では、因果関係における相対名詞（原因／結果）が用いられている。

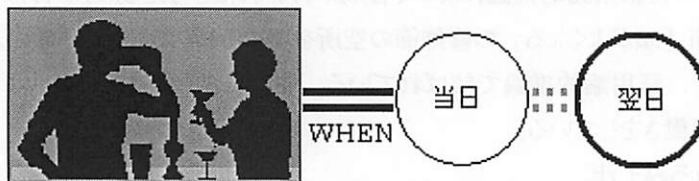


図11 お酒を飲んだ翌日

4. 英語の前置詞ofと日本語の格助詞ノ

名詞と名詞とがノで結ばれる連体修飾構造は、連体修飾節と似たような日英対照を示す。まず英語のofについて述べ、続いて日本語のノについて言及する。

4.1 英語のofと連体修飾

『コーパス活用ロングマン実用英文法辞典』によれば、ofの用法は次のようになる。

①「所有すること」(having, owning, possession)を表す。N1(所有物) of N2(所有者)

例) the owner of the car a friend of Mozart

②全体(whole)に一部(part)を結びつける。N1(一部) of N2(全体)

- 例) the top of the hill the handle of a knife
- ③集団に対して構成員 (member) を結びつける。N1 (構成員) of N2 (集団)
- 例) a Member of Parliament the last month of the year
- ④量 (amount) を表す。N1 (量) of N2
- 例) a lot of noise [noises] a large number of people
- ④N1はしばしば、all, some, muchのような代名詞である。
- 例) all of the women some of the dust
- ⑤crowd, group, bunchのような郡名詞の後ろで使う。
- 例) a group of students a range of mountains
- ⑥容器 (containers) や単位 (units) を指す名詞の後ろに来る。
- 例) a bowl of fruit a carton of milk
- ⑦N1とN2の関係は、動詞と目的語の関係である。N1 (V) of N2 (O)
- 例) the election of the President the study of history
- ⑧N1とN2の関係は、動詞と主語の関係である。N1 (V) of N2 (S)
- 例) the death of Diana the roar of a lion
- ⑨N1とN2の結びつきは、be動詞の結びつきのようである。
- 例) the weakness of the pound the excitement of the game
- ⑨N1とN2は同一人物、あるいは同一物を指すこともある。
- 例) the art of painting the city of Athens
- ⑩N1をN2の表す性質に結びつける (かたい書きことば)。
- 例) a man of courage a woman of ability

このうち①はN1とN2とがhaveで結ばれ (N2 HAVE N1)、ofの本来の意味 (プロトタイプ) である。②～④は本来の意味が抽象化し、 $N1 \subset N2$ という空間的な包含関係となったものである。⑤⑥は所属を表すが包含関係は $N1 \supset N2$ と逆になっている。⑦⑧は包含関係でなく統語的な格関係 (N1: 動詞、N2: 主語・目的語) が明示されている。⑨⑩は①～⑥のように包含関係でとらえることも不可能ではないが、それ以上に $N2 = N1$ または $N1 = N2$ といった同格的側面が前景化されている。例えば⑨は「The pound is weak」、「The painting is art」とbe動詞で結ばれている ($N2 \text{ BE } N1$)。⑩はそのままではbe動詞では結べないが、例えば「a man of courage」は「その人がまさに勇氣そのものである」という意味であると考えれば、「 $N2 \text{ BE } N1$ 」の拡張であると言える。したがってofの用法は以下のように分類することができる。

- (1) 所有関係 ①
- (2) 包含関係 (部分と全体、 $N1 \subset N2$) ②③④
- (3) 所属関係 (容器と内容など、 $N1 \supset N2$) ⑤⑥
- (4) 格関係 ⑦⑧

(5) 同格関係 ⑨⑩

このようにofは力関係（所有）、空間的關係（包含、所属）、文法的關係（格關係）、論理的關係（同格）など、N1とN2とが密接な關係で結ばれており、Langacker（2000）はこれを「本質的關係（intrinsic relationship）」と呼んでいる。換言すれば、英語では本質的關係がなければ一般にofで連体修飾關係を築くことが難しいということである。

4.2 日本語のノと連体修飾

日本語のノはどうであろうか。ノの使用域の広さについては寺村（1991：238）で触れているが、どの程度広いかについて明確にしておく必要がある。まず、英語においてofで結べるものは、以下の(1)~(5)のように基本的にノで結ぶことができそうである（但し⑨'でノではなくトイウでしか結べないものもある）。

(1) 所有關係

①車の所有者 モーツアルトの友人

(2) 包含關係（全体と一部）

②その丘の頂上 ナイフの柄

③議会のメンバー 1年の最終月

④多量の騒音 多数の人々

④'女性たちの全員 ほこりのいくらか

(3) 所属關係（容器と内容など）

⑤学生の集まり 山の列（山脈）

⑥ボウル一杯の果物 1カートンの牛乳

(4) 格關係

⑦大統領の選挙 歴史の勉強

⑧ダイアナの死 ライオンのうなり声

(5) 同格關係（be動詞で結ばれる關係）

⑨ボンドの弱さ 試合の興奮

⑨'絵画という芸術 アテネという都市

これらはノではなくトイウで修飾されている。

⑩勇氣の人 才能の女

また寺村のノの分類と比べてみても、(1)(2)(3)が寺村の「④所有、所属、全体・一部の關係」（より厳密には寺村の「③不完全名詞に対する連体補語」も全体・一部の關係に含まれている）、(4)が寺村の「①連用補語の連体化（N1ガ/ヲN2スル）」、(5)が寺村の「②述語名詞の連体修飾語化（N2ガN1デアル）」に相当している。

さらに厳密に見ていくと、日本語の場合はこの他に「ダイヤの指輪」、「金の延べ棒」のようにN1がN2の原材料を表すもの、「英語の新聞」、「ラジオの放送」のようにN1がN2の手段・媒体を表すもの、「函館の人」、「明治の文豪」のようにN1がN2の場所や時を表すもの、「高速の電車」、「一人の生活」のようにN1がN2の様態を表すもの、「日本人の先生」、「フランス語の本」のようにN1がN2の特徴や属性を表すものなど、ノによる連体修飾はさらに広い範囲にわたっている。これらは英語では、N1 N2 (例: a diamond ring) のように語を並べて表現するのが普通で、ofを用いて表現することは少ない⁵⁾。もちろん日本語でも「ラジオ放送」、「高速電車」のように一部ノが慣習的に省略できるものもある。これらは逆に親密すぎるために、英語であればofを介さないで修飾関係が成立する場合であるが、日本語ではこれらにおいてもノを用いて連体修飾語を作ることができるということを意味している。

(6) 語用論的推論

さらに日本語の場合には、これら以外に1a、1bのような、語用論的推論に依存した連体修飾節や相対名詞修飾節にも似た、連体修飾のノの用法がある。

1a. めがねの先生、プラットホームの男性

1b. お酒の翌朝

1aの「めがねの先生」は「めがねをかけた先生」であり、「プラットホームの男性」は「プラットホームに立っている男性」である。これらは上述した「語用論的推論による連体修飾節」のように、英語のofに比べると、かなり語用論的推論に依存した修飾関係である。「～をかけた」、「～に立っている」は「～の」で示されるのみで、その意味関係はコンテキストに依存し、その解釈は話し手と聞き手の語用論的推論に委ねられているわけである。また、1bの「お酒の翌朝」は「お酒を飲んだ日の翌朝」であり、上述した相対名詞修飾節のように、形式上は「お酒」が「当日」の相対名詞である「翌日」を修飾している。また「お酒(を飲んだ)」が「当日」を修飾している部分は内容節と似ている点であり(但し「(お酒)を飲んだ」は「(お酒)の」で示され、その意味は話し手と聞き手の語用論的推論に委ねられている)、「当日」と「翌日」とは語用論的推論によって結ばれている点も相対名詞修飾節と類似している。

このように日本語では、空間的、または文法的、論理的に関連づけられた本質的關係が存在しなくとも、単にその場のコンテキストの中で語用論的推論が成立すると考えれば、ノで結び、連体修飾語になることができる場合が多いようである。

さらに寺村(1991:240)では、「砂の女」、「赤いアウディの女」、「死の漂流」のように、一般常識をこえた、その時代の社会常識のようなものが関与する部分があるノの用法について触れている。これらはその時代の社会的なコンテキストを背景とした語用論的推論により支えられた連体修飾関係であるといえる。

5) さらに「radiobroadcast (ラジオ放送)」のように一語化したものもある。また英語にも「the bar of gold (金の延べ棒)」のように、ofを用いることができるものもないわけではない。

以上をLangacker (2000) のofの図式にしたがって図示したものが図12である。左側下段の1-a、1-b、1-cが本質的關係 (図では太い二重線で示されている) による連体修飾用法で、その上段1はそれらのスキーマであり、右側下段の2-aが語用論的推論 (薄い破線) による連体修飾用法、2-bが相對名詞を含む語用論的推論による連体修飾用法で、その上段2はそれらのスキーマである。最上段はノによる連体修飾の意味構造全体をまとめる超スキーマである。なお図12の1、1-a、1-bはLangacker (2000) がofの分析で用いた図式をあえてそのまま用いている (但し日本語の「N2のN1」と英語の「N1 of N2」という語順の違いから、tr、lmが逆になっている)。1-cはそこから必然的に導かれるものである。2、2-a、2-bは語用論的推論を薄い二重破線で表している。最上位のスキーマは日本語のノによる連体修飾が語用論的な推論が成立すれば、連体修飾を作れることを示しており、この点が本質的關係を必要とする英語のofによる連体修飾との違いである。

また、図13は日本語の連体修飾節による修飾關係を同じように図示したものである。連体修飾節は事態を表すため四角で表され、被修飾名詞は参与者であるためは丸で表されている (同格關係の内容節3-bでは、修飾節と同格であるため、図示上やむを得ず四角みを帯びた丸になっている)。

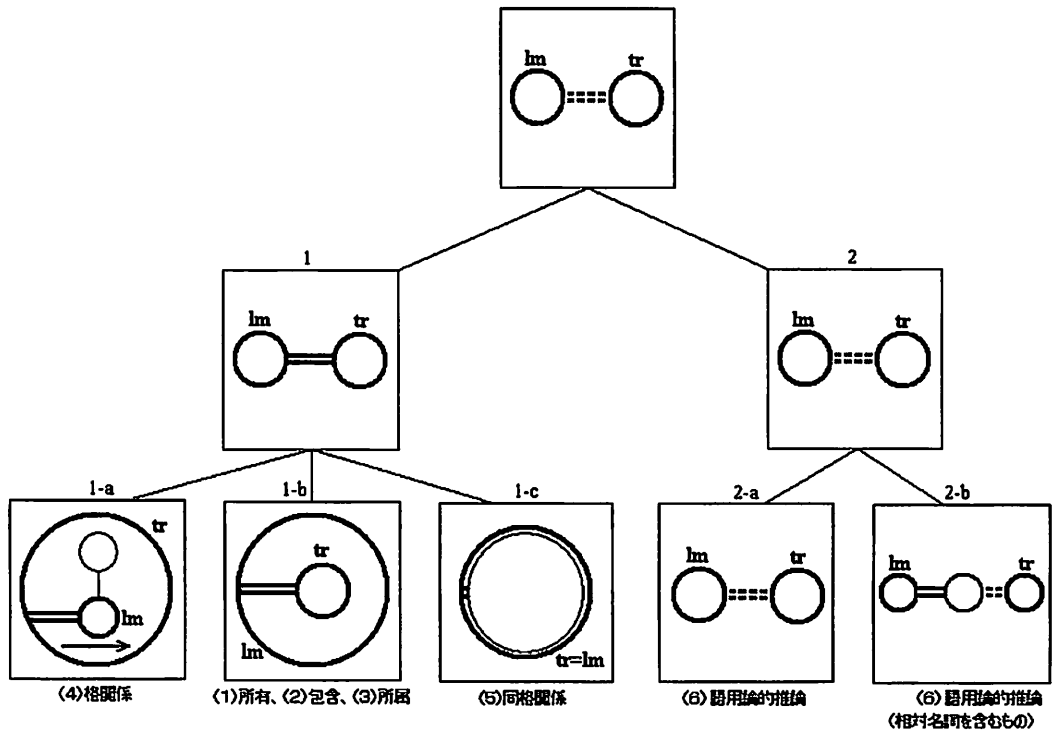


図12 日本語のノによる連体修飾の意味構造

3-aが「魚を焼く男」、3-bが「酒を飲んだ日／ところ」、3-cが「酒を飲んだ事実」、4-aが「魚

を焼くにおい」、4-bが「酒を飲んだ翌日」を示している。最上段は日本語の連体修飾の意味構造全体をまとめる超スキーマである。どれも被修飾名詞がtr、修飾節がlmとなっている。ノも連体修飾節も「本質的關係による連体修飾 (1、3) 」と、「語用論的推論による連体修飾 (2、4) 」が存在しており、さらに、ノの1-aは格関係により修飾関係が成り立つ補足語連体修飾節 (3-a) 、ノの1-bは内容関係の内容節 (3-b) 、ノの1-cは同格関係の内容節 (3-c) と似ており、ノの2-aが語用論的推論による連体修飾節 (4-a) 、ノの2-bが相対名詞修飾節 (4-b) と似ている。また英語では本質的關係による連体修飾 (1、3) がほとんどであるが、日本語では語用論的推論による連体修飾 (2、4) も発達している点も似ている。また最上位のスキーマは日本語の連体修飾節が被修飾名詞との間に語用論的な推論が成立すれば、連体修飾関係を作れることを示しており、この点が本質的關係を必要とする英語の連体修飾節との違いである。

もう一つ、英語のofが本質的關係に対し用いられるのに比べ、日本語のノがよりゆるい関係でも連体修飾語を作れることを示す例がある。Langacker (2000: 84) では、以下の2a~2cのような例文を挙げ、動詞 (他動詞) の目的語がofにより、主語がbyによって修飾語になっていることを指摘し、それは目的語が主語よりも動作を表すchant (唱和する) に対し本質的關係 (intrinsic relationship) にあるためだと指摘している。

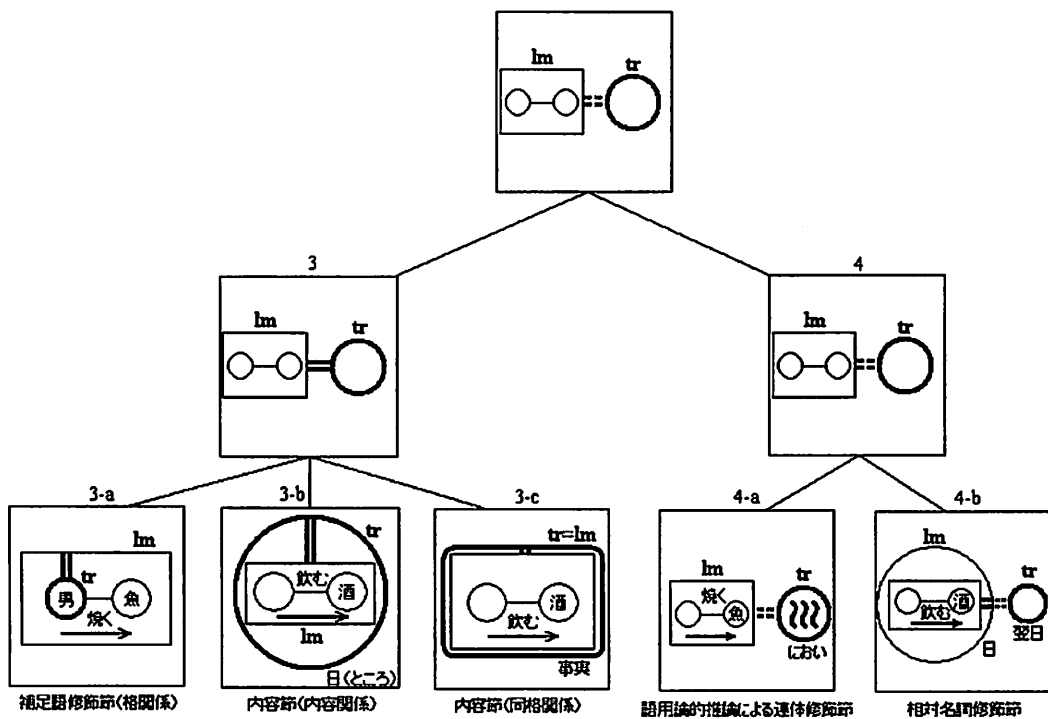


図13 日本語の連体修飾節の意味構造

2a. the chanting {of/by} the demonstrators

2b. the chanting of the slogans

2c. the chanting of the slogans by the demonstrators (Langacker 2000: 84)

ところがこれらの文を日本語訳すると、2aは「デモ参加者たちの合唱」、2bは「スローガンの合唱」、2cは「デモ参加者たちのスローガンの合唱」と、いずれの場合もノを用いて連体修飾語を作ることが可能である⁶⁾。つまり英語のofは修飾関係に本質的關係を求めるのに対し、日本語のノではそのようなことは必ずしも求められないことを示している。

5. 考察

以上の分析から日英両語の連体修飾構造の一貫した特徴がかなり明らかになってきた。連体修飾節にせよ、ofによる連体修飾にせよ、英語では語用論的推論への依存度が低い本質的關係 (intrinsic relationship) が要求されるのに対し、日本語では最上位の超スキーマを見ればわかるように、連体修飾語でも、ノによる連体修飾でも、語用論的推論が成立すれば修飾関係が成立することがわかった。ではこうした日英両語の違いは何によって生じるのであろうか。

英語はSubject-Predicate言語 (またはSubject Prominent言語) と言われ、日本語はTopic Comment言語 (またはTopic Prominent言語) と言われることがある。前者は主語を始めとした補足語間の統語的な関係が重視されるのに対し、後者はトピックやそれに対するコメントの内容は、前者に比べると話し手の主観的要因により決められることが多い。このような違いが連体修飾構造にも影響を及ぼしているのではないだろうか。

さらに池上 (2000) では、英語は「話し手責任」の「ダイアログ (対話) 型言語」であり、日本語は「聞き手責任」の「モノログ (独話) 型言語」であるとしている。言語は「思考」と「伝達」という2つの役割を担っており、思考の手段としての役割を重視すれば、モノログ型となり、伝達に際しての責任は話し手ではなく、聞き手に問われることになるが、伝達の手段としての言語の役割を重視すれば、ダイアログ型となり、伝達に際しての責任も話し手に問われることになる (森山 2007)。モノログであれば、何をトピックとして取り上げ、そのトピックの何についてコメントするかは話し手が主観的に決めればよいことになるが、ダイアログでは、聞き手への伝達が重視されるために、より客観性が重視され、それが伝達のルールとしての統語関係の重視へとつながっていく。

このように連体修飾構造において、英語では本質的關係が求められるのに対し、日本語の場合には、その場のコンテキストに支えられた語用論的推論に依存した用法が見られるのは、このよ

6) 但し、ノの重複を避けるためには、目的語のノのほうを省略して「デモ参加者たちのスローガン合唱」となる (逆は不可)。これはノを介さない結びつきのほうがノを介した結びつきより強いことを用いて、主語より目的語のほうが動詞と本質的關係を持っていることを示したもので、ofの使い分けと似ている (寺村1991: 246)。

うな言語類型論的特徴が反映した結果であると言えるのではないだろうか。

6. まとめ

以上、日英の連体修飾構造を対照しながら、日本語の連体修飾構造の特徴を明らかにしてきた。連体修飾節を用いた連体修飾にしても、of/ノを用いた連体修飾にしても、英語の場合には、空間的、文法的、論理的な意味での本質的關係 (intrinsic relationship) が求められるのに対し、日本語の場合にはそのような用法のほかに、その場のコンテキストに支えられた語用論的推論に依存した用法も発達していることが明らかになった。

これまで連体修飾は、連体修飾節における「内の関係」、「外の関係」や、of/ノの意味・用法で日英の対照がなされたことは多かったが、言語ごとに、連体修飾節とof/ノを用いた連体修飾とをひとくくりとし、同じような言語類型論的特徴を有していることに注目した研究は見られなかった。またそのような言語類型論的特徴を日本語教育に生かすための研究もあまりなされてこなかった。

本稿では認知言語学的な観点を用い、連体修飾節とof/ノによる連体修飾とに同じような言語類型論的特徴 (本質的關係に限られるか、語用論的推論による連体修飾も発達しているか) が見られることが示され、さらにその修飾構造の違いが認知言語学的観点からのイメージ図式 (合成やイメージスキーマ、意味構造の図式) により、かなりわかりやすく示すことができた。ここで明らかになった知見は今後日本語教育における連体修飾の指導に生かしていくことができるであろう。

具体的には、英語などには見られない、語用論的推論による連体修飾節や、語用論的推論によるノの連体修飾用法の習得が困難であると予想される。但し、1950年代にさかんだった対照分析仮説への批判で明らかのように、単に母語に存在すれば習得が容易で、母語に存在しなければ習得が困難であると言うことはできない。本稿では十分な議論ができないが、「本質的關係による連体修飾」は様々な言語に見られ、かつその修飾関係も明確であることから、連体修飾としては無標であるのに対し、「語用論的推論による連体修飾」は、言語によって成立しないものも多く、かつ修飾関係も語用論的推論に依存し、さほど明確とは言えないことから、連体修飾としては有標である可能性が高い。であるとすれば、英語母語話者にとって、無標であり、母語にも存在する「本質的關係による連体修飾」は習得が容易であるが、有標であり、母語には存在しない「語用論的推論による連体修飾」は習得が難しく、教育現場においては後者が重点的に教えられることになるであろう。具体的には、①日本語の連体修飾節では、英語であれば関係節で表される「補足語修飾節」やthat節や関係副詞節で表される「内容節」だけでなく、「語用論的推論による連体修飾節」や「相対名詞修飾節」も連体修飾節になりうることを具体例やイメージ図式とともに教える、②ノの用法でも所有、所属、包含、格関係、同格といった本質的關係だ

けでなく、語用論的推論に基づく連体修飾用法であっても、ノをつけて連体修飾語を作ることができることを具体例やイメージ図式などを用いて示す、などが可能であろう。さらに日本語のノは原材料や手段・媒体、時や場所、様態、特徴・属性などのよりいっそう親密な関係においても省略されることなく連体修飾を作ること教える必要があるであろう。

◀ 参考文献 ▶

- 池上嘉彦 (2000) 「日本語論への招待」, 講談社
- 大関浩美 (2004) 「第一・第二言語における日本語名詞修飾節の習得過程」, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科国際日本語専攻博士学位論文
- 奥津敬一郎 (1974) 「生成日本文法論」, 大修館書店
- 加藤重広 (1999) 「日本語関係節の成立条件(1)ー先行研究の整理とその問題点ー」, 『富山大学人文学部紀要』 30, pp.65-111
- 加藤重広 (2000) 「日本語関係節の成立条件(2)ー文法論的要因と語用論的要因」, 『富山大学人文学部紀要』 31, pp.71-156
- 加藤重広 (2003) 「日本語修飾構造の語用論的研究」, ひつじ書房
- 白川博之 (1986) 「連体修飾節の状況提示機能」, 『言語学論叢』 5, 筑波大学文芸言語研究科, pp.1-16
- 武田 修一監訳 (2003) 『コーパス活用ロングマン実用英文法辞典』, ピアソン・エデュケーション
- 寺村秀夫 (1975-1978) 「連体修飾のシンタクスと意味 その1ーその4」, 『日本語・日本文化』 4~7号, 大阪外国語大学留学生別科
- 寺村秀夫 (1980) 「名詞修飾部の比較」, 国広哲弥編, 『日英語比較講座ー文法二』, 大修館書店, pp.221-260
- 寺村秀夫 (1981) 「日本語の文法(下)」, 国立国語研究所
- 寺村秀夫 (1991) 「日本語のシンタクスと意味 第三巻」, くろしお出版
- 西山祐司 (1993) 「「NP1のNP2」と「NP2 of NP1」」, 『日本語学』 12/10, pp.65-71
- 松本善子 (1993) 「日本語名詞句構造の語用論的考察」, 『日本語学』 12/11, pp.101-114
- 松本善子 (1994) 「意味から見た連体修飾のいろいろ」, 『月刊言語』 23/9, pp.124-127
- 森山新 (2007) 「グローバル時代に求められる総合的日本語教育と認知言語学」, 『研究年報』 3, お茶の水女子大学比較日文学研究センター, pp.111-117
- Comrie, B. (1996) The unity of noun-modifying clauses in Asian languages. *Proceedings of the 4th International symposium on Pan-Asiatic Linguistics*, pp.1077-1088.
- Comrie, B. (1998) Attributive clauses in Asian languages: Towards an areal typology. In W. Boeder, C. C. Schroeder, K. H. Wagner, and W. Wildgen (Eds.), *Sprache in Raum und Zeit, In memoriam Johannes Bechert, Band 2*, pp.51-60, Tübingen: Gunter Narr.
- Comrie, B. (2002) Typology and language acquisition: the case of relative clauses: some Khmer evidence. In A. Giacalone Ramat(Ed.), *Typology and second language acquisition*, pp.19-37, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2000) *The meaning of of. Grammar and conceptualization*, Mouton de Gruyter, pp.74-90.
- Matsumoto, Y. (1997) *Noun-modifying constructions in Japanese: A frame-semantic approach*, Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- Teramura, H. (1970) The syntax of noun modification in Japanese. *The Journal-Newsletter of the Association of Teachers of Japanese*, 6, pp.64-74.

